

ユダヤ・イスラエルに思う⑨

二十世紀最大の発見、死海文書

長谷川 修

ベドウィンの羊飼いが、洞窟に逃げ込んだ山羊を追い偶然見つけた古い甕の中には、嚴重に封をした巻物があった。時は一九四七年、場所は死海の西側、発見されたのは二千年前のヘブライ語聖書（旧約聖書）で、これまで最古とされていた一世紀初めの「レニングラード写本」を略千年遡る。

その後、中東戦争の休戦期である一九五一年から五六年にかけて近辺の洞窟で精力的に発掘が行われ、一一個の洞窟から大量の貴重な文書類が出現した。その後の調査を踏まえ概要を記すと、次のようになる。

- 一、文書数…写本が八百から九百冊と断片が十数万枚
- 二、成立年…BC二五〇年からAD七〇年
- 三、内容別…旧約聖書「正典」が全体の四割、旧約聖書「外典」と「偽典」が三割、その他クムラン共同体の規則や儀式等が三割
- 四、言語別…ヘブライ語が八割、アラム語が二割弱
- 五、材料別…羊皮紙が大部分

文書は単に千年古だけでなく、歴史的意義としては、「ラビ・ユダヤ教成立（AD一世紀末）以前のユダヤ教の実像を明かす文書」であり、生前のイエスが使ったかも知れない文書で「初期キリスト教の成立を知るための間接的文書」でもある。

世界の考古学者チームによる解読作業は難航した。一九九〇年までの三十年間、文書の開示はほとんどなかったことから、バチカンに不都合なことが書かれているとか、海賊版の出版、翻字の著作権を巡っての訴訟等、スキャンダルにまみれた。

しかし九〇年にリーダーが交替し公刊は進みだし、公式校訂版（ヘブライ語、対訳英語）は九三年から逐次出版され二〇〇九年に完成した。また一〇年にはオンラインによる公開が始まり、誰もがアクセスできるようになった。なお日本語訳の出版は現在進行中だ。

今後は、「死海文書と主流ユダヤ教との関連」や「ユダヤ教とキリスト教の連続性と断続性」等について学術的論議が行われることだろう。「世紀の大発見」に基づく宗教史の見直しに立ち会えることに、かすかな興奮を覚える。